
零崎正識の人間描写(ムータロスのネタ倉庫)

零崎 正識(ムータロス憑依ver

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

零崎正識の人間描写（ムータロスのネタ倉庫）

【Nコード】

N3965T

【作者名】

零崎 正識（ムータロス憑依ver

【あらすじ】

やってしまいました、新連載（？）

夢に香霖したマリーモリトワネットの「完結させられないのなら、ネタ倉庫として晒せばいいじゃない」と言うお告げに従い作りました。

だが私は謝らない。

永遠に誤り続けるだけだ。

基本的には思いついた二次創作のネタやオリジナルライダー、既存

ライダーのオリジナルフォームなどを随時晒していくこの連載（？）

ここにあるネタでお気に召したものがあれば一声だけかけて、自由にお使い下さい。

（他の人に使わせたく無いのであれば、その旨を申し出てくれればそのネタは削除します）

ここにあるのはどうせ作者の力じゃ完結させられっこないけれど、せつかくのネタだし忘れてくのは勿体無い。

そんなネタばかりなので、どうか皆様の手で救い上げて行って下さい。

自分の小説で使う目処がだった設定は残して行きます。

（現在連載中のDCD×OOOで使う予定のサバクコンボネタやラオズタトバカンドロイド、オーズトライドベンダーなど）

ただし、完結させる目処が立ったネタは削除します

一応予定では、

ディケイド×戯言シリーズ、

アギト×アルティメットファクター、

カブト×ムシウタ

ディケイド×され竜、

ディケイドオリジナルライダー、

W系オリジナルライダー、

OOOオリジナルコンボ、

なんかを載せる予定（て言うかぶっちゃけ作者紹介ページに好きなラノベとして挙げた物は基本的にディケイドとのクロスオーバーを考えた事がある）なので、ここに挙げた作品を知っている方は暇潰しに通りすがって下さい。

タビビトビート 邂逅／開稿（前書き）

まず最初は、人間シリーズ完結記念にアイデアが生まれ、埃を被っていた所をつい先日、杳零邂逅記念日に加筆した仮面ライダーディケイド×戯言シリーズ。

題して、タビビトビートです。

出来るだけどちらかの原作しか知らない方でも楽しめるようには配慮しましたが、やはりそこかしこに仕込んだ小ネタは原作を知っている人が（「ー」）ニヤリとする（もしくは呆れ果てる）ぐらいなので、知らない方には余剰パーツ気味な感は否めません。
それではどうぞ

タビタビート 邂逅／開稿

ーガラララララー

写真館の背景ロールが降り、世界の移動が完了した。

前の世界は比較的田舎な印象の場所だったのに比べ、窓から覗く
今度の世界の風景は市街地の真っ只中という印象を受ける。

しかし、その街中はただ『日本のどこか』の市街地というだけでは
なく、決定的な特徴があった。

「あつ！みてみて夏海ちゃん。
あれ金閣寺だよね！？」

優しそうな青年、小野寺ユウスケが楽しそうに窓から見える風景
を指さす。

「という事は、今度の世界は京都ですか。
懐かしいですね」

この光写真館の主の孫娘、光夏海は思い出を反芻するかのように
瞳を閉じる。

「あら？懐かしむって事は、夏海ちゃんはココに来た事あるワケ？」

そんな夏海に、銀色の喋るコウモリ（♀）キバーラが話しかける。

彼ら（と、言うより彼らの中の一人の青年）を毛嫌いする男と通

じていたり、色々謎の多い彼女（？）ではあるが、基本的には仲間なので彼らと行動を共にしている。

「はい。」

もちろんこの世界ではないと思いますが、元いた世界で中学生の頃に修学旅行に行ったんです。

高校は部活動を優先していたので一度きりでしたが」

「アハハハハハ……」

夏海が『部活動』という単語を口にした時、ユウスケとキバーラの口からはなんとも言えない苦笑いが零れ落ちていった。

実はこの夏海という少女、真面目な顔をして高校時代はかなり『個性的』な部活動に勤しんでいたのである。

「でも、ここはなんの世界なんでしょうか？」

夏海の声に釣られるようにして、一同はもう一度改めて降りてきた背景ロールを見る。

目に痛い程鮮烈な赤で描かれた稲妻や蒼い雫、医療廃棄物に描かれているマークによく似たものや橙の太陽、ナイフにマラカスにハサミにバット、白百合に蜘蛛の巣にツバメにルービックキューブ、時計天道虫鎌……挙げていけばキリがない。

そしてそれらを覆うように背後に描かれている、巨大な二重円。

よく見れば、外側の円も内側の円も、その縁に触れた絵柄は歪められ、断ち切られ、薄められ、あるいは塗り潰されている。

突然、それをみていたユウスケが、何かを閃いた。

「わかった、オリジナルの響鬼の世界じゃないかな？」

ホラ、前来た時は東京で、関東支部の鬼の人達に会っただろ？
だから今度は関西支部の鬼の人に会うとか」

「どうだかな？」

別に仮面ライダーがいる世界と決まった訳じゃないだろ。

それにここが本当に『俺達が知ってる』京都なのか、この世界に滅びが起きているのかもわからないんだ。

考えたって仕方ないだろ」

真剣に考える夏海達に、これまで一人物静かにコーヒーを飲んで
いた青年、門矢 士が茶々を入れる。

そうなのだ。

ライダー大戦を終えて、士は異世界を巡る旅その物こそが自分の
世界として様々な世界を巡った。

ライダー大戦の時に自分を倒そうとしてきた、所謂「オリジナル」
と呼ばれるライダー達の世界に立ち寄る事もあれば、再び「リ・イ
マジネーション」と呼ばれるライダー達の世界を訪れる事もあった
し、ライダー大戦の時には居なかったライダー達の世界やライダー
が存在しない世界、そもそも正義の味方や悪の組織・怪人が居ない
世界なんてのもザラだったし、「滅びの現象」が起こっているか否
かもまちまちで時・場所も様々、彼らの知る『地球』とは全く異な
る地理だったり、一度訪れた世界でも時代や国がバラバラな場合も
あり、相変わらず士達は新しい世界につく度に翻弄されているのだ

った。

「というか、背景ロールの絵柄に全く見覚えが無いんだ。少なくとも俺達が今まで旅した世界や出会ったライダー達が居る世界じゃないだろ。」

「というか一切楽器のない絵で響鬼関係の世界だなんて俺は認めん」

尚も口を休めぬ土は、ユウスケや夏海が立てた予想をバツサリと否定する。

「ハハハ、手厳しいな。」

「じゃあ土の予想はなんなんだ？」

「知らん。」

大体、初めての世界だったら予想なんか立てらんねえだろうが」

ユウスケは苦笑いで穏便にすませようとするが、土は変わらず俺様全開。

「でも、いくらなんでもその言い方はあんまりです！

私達だつて一生懸命考えたんですよ！？

光家秘伝！笑いのツボ！！」

―グキツ―

土の態度に憤慨した夏海が、自身の右親指を土の首筋に押し込む。

「アハッ、アハハハハハハ！てめえこのハハ夏ミカン！ハハハハハハ…俺は！ハハただ！ハッハハハ…事実を！あははあっはあ、はあ、はあ、言っただまでだろうが…」

首筋を突かれた瞬間、嫌な音と共に土が自分の意志とは無関係に強制的に笑わされる。

呼吸すら許されずに息も絶え絶えになりつつも、弱々しい事ながらその俺様っぷりを絶やす事なく必死の抗議を口にする土。

「まあまあ二人共、喧嘩はよくないよ。ホラ、これでも食べて落ち着いて。」

今日はそのマークをクッキーにしてみたんだよ」

そこへ、新たな人物が仲裁に入る。

この写真館の主にして夏海の祖父、光 栄次郎だ。

一見すると気の優しいそんな好々爺然とした老人だが、過去の経歴は一切不明、目の前にどんな異常が起こっても大して驚きもせず受け入れ、あるいは受け流すという常人離れした男だ。

ちなみに、酒癖が相当悪いのだろうか、土達の間では、彼にスルメイカとビールを持たせる事はタブーとされている。

（なんでも本人から求めて来る事はないが、うっかり持たせてしまうと事態が異様にややこしくなるらしい）

「仕方ないですね、今日の所はここまでにしておいてあげます。が、次はないと思って下さいね？」

と、土達がクッキーを食べようとテーブルについた時だった。

「すみません。」

「ここつて喫茶店じゃないんですか？」

見知らぬ青年が写真館に入ってきていた。

年の頃は大学生かそれより少し上くらい、ＴシャツにＧパンと比較的ラフな格好だ。

よく見れば、そのＴシャツには写真館の背景ロールに最も大きく描かれているものと同じ二重円が至る所に描かれているのだが、士達がそこに気づく事はなかった。

彼らの注目を一心に集めたものは、青年の目だった。

その目は「死んだ魚のような目」などという使い古された比喻では表現し切れない、いつそ「死者の目そのもの」と言ってもまだ足りぬ。

混沌とし、混濁し、見る者を混乱と困惑の渦に叩き込む漆黒の瞳。

黒曜石のような黒ではなく、一切の光を反射する事を拒んだブラックホールのような闇。

なるべく、あの二重円が彼の象徴であると言うなら先程の背景ロールも頷ける。

彼は異質で歪で異様で異常だった。

人形「ヒトガタ」でありながら異形より尚ヒトデナシ。

彼は存在するだけで周囲を歪ませる、関わるだけで自ずから崩さ

れる。

彼こそがこの世界に訪れた滅びの現象、もしくは彼が真の「世界の破壊者」「ディケイド」であると言われればそれだけで何の証拠がなくとも二もなく三もなく納得してしまいそんな雰囲気。

彼が真にこの世界の住人であるというなら、彼と言う存在を受け入れて尚存在し続けているこの世界すら信じ難い。

最も信じ難いのは、自身も世界から拒絶され、差別される不快を知っている士、その士すらも信じきった夏海、お人好しで優しいユウスケ、誰に対しても態度を変えない栄次郎、これだけ他者を蔑ろにしない面々が揃っている中、彼は何一つアクションを起こす事なく、ただその両の目のみを持って（この目だって別段何かしらの負の感情を浮かべている訳ではない。ただただ「何の感情も浮かべていない」だけだ）幾千の暴言より、幾万の暴行より、幾億の悪意よりも暴力的に圧倒的に絶対的に、これだけの感情を抱かせていると言う事実だ。

何もしていないが故におぞましい、何も思っていないが故にキモチワルイ。

士達の首筋にじつとりと嫌な汗が伝い落ちる。

本能的に士がカードを手に取り、ユウスケが腰に手を当て、夏海がキバーラに手を伸ばし、栄次郎が戸棚へ体を向けた所で、唯一人外だからなのか正気であり続けたキバーラが、さすがに拙いと考えたか青年に声をかける。

「いいえ、残念だけどここは写真館よ」

「そうなんですか、ごく丁寧にどうも」

キバーラの答えに素直に感謝の言葉を述べる青年。

しかし、冷静に考えればこれはおかしい。

普通目の前に喋るコウモリ（しかも銀色）が現れたら多少は驚くだろう。

いや、そういうモノがごく普通に存在する世界だったとしても、「あ、デ・モン」などとそういったモノを示す名詞を口にするだろう。

おそらく彼は相手を区別などしていないのだ。

「テレビが見えるならそれがテレビでもパソコンでも携帯電話でも構わない」と言う感覚で、「話しかけて望む答えが得られるならそれが誰でも何でも構わない」と考えているのだろう。

たとえそれが何もない所から発せられた声でも家族から発せられた声でも総理大臣から発せられた声でも、この青年は揺らがないのだろう。

「しかし参ったな……」。

実はこの近くにあるはずの喫茶店で人と待ち合わせをしているんですが、喫茶店の名前も見ただけですっかり忘れちゃったんですよ。

一応日時と住所はメモしといたんでそれに従って来たはずなんですけど、迷っちゃったかな」

青年は困ったような口調で頭を掻きながら、けれど全く表情を変えずに言う。

「どんな記憶力だよ。

まあいい、住所があつてゐるならその相手とやら十中八九もここに来るだろ。

喫茶店じゃあないが、幸いコーヒーなら出るしな。
な、じいさん？」

「あ、ああそうだね。

でもねえ土くん、何度も言ってるけど、ここは喫茶店じゃないんだよ？

さつきキバーラちゃんも言ってたじゃないか」

次いで土が冷静さを取り戻し、ここに留まるよう提案すれば、話を振られた栄次郎も緊張を解き、若干ぎこちないながらもいつものやり取りを返す。

「そ、そうですよ！

それがいいです！

ゆっくりして行って下さい。

コーヒー代は土君に付けておきますから」

そうして遅ればせながら正気に戻った夏海も、申し訳なく思っているからか多少テンパリ勝手な事を言いながらも、青年にここに留まるよう勧める。

「そうですね。僕としては、このまま会えなくても十全なんですけど……戯言だけだね」

提案を呑んだ青年だったが、相変わらずその声には生気も精気も欠片程もない。

「……おい、いいのかよ土？
あの人ここに置いて。」

そりゃあ悪い人じゃなそうなのはわかったけどさ。
てゆーか夏海ちゃんテンパって結構勝手な事言ってるぞ？」

「いいんだよ、好きに言わせときゃ。
どうせ俺に払う気はねえからな」

夏海が終始テンパリながら会話している間、未だに警戒を解き切れないユウスケが土と小声で話し合う。

「それにどうやら、アイツならこの世界に詳しそうだぜ。
見てみるよ、あのＴシャツ」

そう言っ土は青年の右胸の辺りを指差した。

「あ！あのマークって！」

そう、土は冷静になった時、漸く青年のＴシャツと写真館の背景ロールとの共通点に気がついたのだった。

「あのマークがアイツを指してんならラッキー、悪くてもあのマークが一体なんなのかくらいは聞けんだろ」

そう言っ土は青年と夏海との会話に加わったのだった。

「そう言えば自己紹介がまだでしたね。」

私はの名前は光夏海、夏海って読んで下さい」

士とユウスケも会話に加わった所で、夏海は今更ながら青年の名前を知らない事に気がついた。

「ユウスケです、小野寺ユウスケ。
よろしくな」

夏海に続けてユウスケも名乗る。

「門矢士だ。
特別に門矢様か士様と呼ばせてやろう」

「っゝかゝさくゝん？」

尊大に士が名前を言うと、「真面目にやれ！」と言わんばかりにこめかみをヒクつかせた夏海が親指を構えて士に迫る。

「僕は……そうですね、名を名乗る程の者じゃないんで適当に呼んじゃって下さい」

士と夏海のイチヤつき（？）を苦笑しながら見ていた青年は、そんな不可解な事を言う。

「ややこしい奴だな。
知り合いからは苗字と名前どっちで呼ばれてんだ？
苗字が多かったら飯島、名前が多かったら板野と呼ぼう」

変わった奴だとは思いながらも、士は言われた通り自由に呼ぼうとする。

その際、またしても夏海から親指が飛ぶのでは……、と危惧していたが、夏海は青年の言った事を常識で理解しようと頭を悩ませている為、その心配は杞憂に終わった。

「なんで両方苗字なんですか。
でも、すいません。

ご期待に添えずに申し訳ないんですが、
僕って基本的にあだ名ばかりで本名で呼ばれないんですよ」

士の選択肢にツツコミを入れつつも、青年は第三の答えを口にす
る。

「へえー、じゃあなんて呼ばれてんの？」

普通に考えたら家族など、あだ名で呼ばなそうな者なども浮かび
そうだが、疑いもせずにユウスケが問う。

「そうですね……。

いー兄、いーいー、いっきー、いっくん、いーさん、いの字、いー
たん、いーちゃん、戯言遣いのお兄さん、師匠、狂言回し、奇術師、
嘘吐き、詐欺師、奇策師、詭弁家、欠陥製品、人類最弱、なるよう
にならない最悪「イフナツシングイズバッド」、モンキートーク、
無為式、腹切りマゾ……とまあ、こんな所ですかね」

青年、戯言遣いが、これまで一度以上は呼ばれたであろうあだ名
を列挙していく。

「なんでそんな酷いあだ名ばかりなんだよ……特に後半」

少々特殊なあだ名の数々に呆れる士。

「最後のは自分でも理不尽だと思っているんで、使わずに頂けたら嬉しいです」

本当に嫌なのか、思いつ切り顔を顰める戯言遣い。

「じゃあ俺はいーだな。
よろしくな、いー」

結局、あだ名と言えども普段通り、呼び捨てにする事に決めた士。
さり気なく右人差し指を突き出すが、一瞬場の雰囲気が凍りつき、その後何もやなかったかのように流されて余計に傷ついたのは自業自得だ。

ちなみに、それぞれ夏海はいーさん、ユウスケはいーくん、キバ
ーラと栄次郎はいーちゃんと呼ぶ事に決めたのだった。

（「いーちゃん」と呼ばれた時だけほんの一瞬、顔を顰めるのには
「腹切りマゾ」とは違った理由があるのだろう）

「それですね、実はいーさんに尋ねたい事が……」

自己紹介も終わり、次は戯言遣いにこの世界の事を聞こうとした
その時だった。

―バッターン！―

某海賊戦隊な某赤っ鼻バラバラ船長の登場シーンもかくやと言わ
んばかりにド派手な音がして、一人の女性がこの写真館に入って、

いや、襲撃してきた。

「いいいいっくーん！ポポポルナレフが！！」

名前を呼ばれた当の戯言遣いは、相変わらず無表情だったが、士達はただただ啞然としていた。

まず驚いたのはその格好。

先の戯言遣いの第一印象が全ての色をしっちゃんかめっちゃんに混ぜた黒、あるいは何も無い無色透明だとするならこの女性は赤。

赤い、とにかく赤い。

鮮烈なまでに赤く、鮮血のように紅いだけ感じさせる女性だ。

Wの世界の照井と言う男をも凌駕している。

髪が赤いのはもちろんの事、上着、パンツ、ハイソックス、パンプス、その全てが血染めの深紅以上に紅い。

黄色いイナズマ型の髪留めがアクセントになっている。

色が異なっているのだからに愧が、この髪留めをこの女性の印象である赤に染め上げたなら、ちょうど先の背景ロールに同じマークがあつたように思う。

次に驚くのはその容姿だ。

傷一つない白磁のような肌、190はあろうかと言う足の長いモ

デル体型、メリハリの利いた体、整った目鼻立ちと、画家や音楽家、小説家など、芸術に携わる人間が見れば何かを創作せずにはいられない程魅力的な女性だ。

ただ、惜しむらくは戯言遣いと同じくその目。

例えるなら鷹の目だろうか、鋭すぎて睨まずとも気の弱い人間なら心臓麻痺に追い込みそうなその目つき。

全身から真の王者の風格とでも言うべきものが滲み出ており、常人ならまともに目を合わせる事が出来ずに圧倒され、萎縮してしまう。

そして最後の驚愕はその台詞。

いっくんにポルナレフ、固有名詞こそ違えど、その台詞は口調、声質、何もかもがいつか巡った世界、オリジナルのファイズの世界にいた、菊池啓太郎の台詞そのものだった。

「あれ？

つかしーなあ？

アタシの記憶が確かなら、突然登場したり突然電話をかけたりする時の枕言葉と言えはこの台詞なんだがなあ？

いーたんは知らねえ？」

土達が絶句していると、女性はノーリアクションが不満だったのか、先程とは異なり勝ち気そうな口調、声色（おそらく地声）で戯言遣いに問う。

容姿に釣り合ってその声も麗しき美声だ……口調が丁寧なら、の

話だが。

「知りませんよそんな枕言葉。

いつくんとポルナレフは知ってますけどその2つを組み合わせると枕言葉になる、と言うのは初耳です。

あと、そんなホイホイ声帯模写を安売りしないで下さい」

対する戯言遣いの答えは相変わらず平坦そのもの。

しかし、その声は若干疲れているようにも聞こえる。

会話の慣れを見るに、戯言遣いが待ち合わせしていた相手と言うのは彼女の事なのだろう。

「バツカ、こういうのは細部じゃなくてテンプレが大事なんだよ。

『ただし』と『みたいな』入れて巫女子ちゃんの声でそれっぽい事言やあ、例え全くのオリジナルでもそれは巫女子ちゃんの台詞だろう？それに声帯模写だって減るもんじゃなしに」

よくわからない例えを出しながら拗ねたフリをする女性。

どんな服でも似合う女性はまああるが、どんな格好をしてどんな台詞、どんな仕草をしてもサマになる女性、と言うのは中々稀有な存在だろう。

「減りますよ、真似された方の存在価値とか。

哀川さんは出番の不均衡云々言ってますがね、真似されればされる程真似された方の希少価値とかその辺は下がる一方ですよ。

てゆーかどうすんですか、哀川さんの衝撃登場シーンに門矢さん達啞然としちゃってるじゃないですか」

女性の苗字は哀川と言つらしい。

彼女は戯言遣いに苗字を呼ばれた瞬間、

「だからアタシの事を……」

一瞬にして間合いを詰めて戯言遣いの背後に回り込み、

「苗字で呼ぶなって……」

首に手を回し、

「言つてんだろぅが!」

そのままヘッドロックをかけて戯言遣いを締め上げた。

「アタシの事を苗字で呼ぶのは敵だけだつて言つてんよなあ!?
いつもいっつも!!

それを2回だあ?

ふざけてんのかテメエは!!

オラア!

なんとか言えや!!」

すぐに手を離し、戯言遣いを蹴りつける女性。

蹴り上げと踵落としの∞コンボで、パンプスの爪先と踵が刺さる
度に戯言遣いはカエルが潰れたような呻き声を上げる。

一切出血は無いのに、服装と相まってその様子は返り血に塗れた

羅刹のようだ。

「ちょ、ちよっと！

さすがにそれ以上はいーさんが……」

戯言遣いの時とは違った理由で言葉を失っていた土達が漸く正気に戻り、女性の暴虐を見ていられなくなった夏海が止めに入ろうとする。

が、しかし、

「おいユウスケ、今あの女がいーの元に行くのが見えたか？」

「いいや全然、土は？」

「俺も全くだ。

あの女、ひよっとしたら夏ミカンより危険かもしれん」

夏海は男性二人の会話を聞き咎め、土の方へと振り返った。

……般若の形相を浮かべて。

「つ・か・さ・く〜ん？

どうしてそこで私が比較対象になるんですか！！

光家秘伝！笑いのツボ！！」

ーゲキッーー

再び嫌な音が響き渡り、土の顔を強制的に歪な笑みの形に歪める。

「アハッ、アハハハハハハ！またなハハのかよアハハ夏ミカン！ハハハハハハ…やっぱり！ハハ訂正だ！ハッハハハ…夏ミカンの方が！あははあっはあ、はあ、はあ、危険かつ凶暴だ…ハハハハハハ！ひいつ、ひいつ、ひいつ」

いきなり笑い出しながら文句を言い、窒息死寸前になっている土に意識が集中し、自然と戯言遣いへの暴行が止まる女性。

この場合、あのまま夏海が正面から止めようとしても止まらなかつたであろう事を考えると、戯言遣いの命の恩人は夏海ではなく土と言う事になるのだろうか。

「ハハハッ、面白エなあお前の技。

笑いのツボってそう言う意味じゃねえだろうに。

なあ、それって一体どうなんだ？」

土の様子が、まさに『笑いのツボに』ハマったらしい女性は、未だ怒りの収まらぬ夏海にノウハウを問う。

「えっとあの…すみません、一応これ光家の秘伝ですし、やたら遣われると危険ですから」

先程の戯言遣いへの暴虐が恐ろしいのだろう、申し訳なさそうにやんわりと断る夏海だったが、

「おい、ちょっと待て夏ミカン！

お前今『危険』つつたか！？

んな危険な代物を俺に何十っ発かましてんだよ！？」

漸く復活した土に怒涛の如く責め立てられる。

「自業自得です！

だいたい士くんの場合はいつつもいつつも……」

「へえ、やっぱり面白エ技術は習うより慣れろってか。

あーあ、またぜろりんでも来ねえかなあ……。

来たら実戦で身につけて実践してやれんのに」

再び言い争い（と言う名のイチヤつき）を始めた士達を尻目に、
女性はそんな危険な眩きを漏らす。

「で、哀かw……潤さん。

今日は一体何だってこんな京都のはずれの喫茶店なんか僕を呼び
出したんです？

いや、喫茶店じゃなかったんですが」

おそらくはああ見えて相当手加減されていたのだろう、暴虐の嵐
が止んだ瞬間に復活した戯言遣いが、この赤い災害とも言つべき女
性、潤に問いかける。

「あーーっ！！

そうだったそうだった！

このアタシとした事がすっかり忘れてたぜ。

えーっ……」

突然叫び声を上げた潤に士達はビクリと身体を一度震わせ、再び
潤に注目が集まるが、当の本人はそんな視線は銭湯のシャワー以下
だとも言つように気軽に受け流し、一度思案するように瞳を閉じ
た後、士達を見回す。

「そのピンクのトイカメラ、アンタが世界の破壊者って奴だな？
ちよっと来て貰おうか」

そして土に狙いを定めると、有無を言わず腕をガツシリ掴み、
そのまま外へと連れ出して行った。

「ね、ねえ夏海ちゃん。
これって……」

余りに突然の事に何一つ出来なかったユウスケが、恐る恐る夏海
に尋ねる。

「つつつ、土くんが……」

続く夏海も、今日一番の驚愕に言葉を上手く紡げない。

「拉致、されましたね」

結局、潤の行動に慣れ（させられ）ている戯言遣いが一番冷静に
一言だけ紡ぐ。

「どどどどどうしましょうユウスケ！」

「そうだ、警察だ警察！
迷子の放送を入れて貰わないと」

戯言遣い言葉を皮斬りに、一気に恐慌状態に陥る夏海達。

「落ち着いて下さい二人共。
とりあえずあの人が向かいそうな場所ならなんとなく思い浮かびま

す。

僕達も向かいましょう」

唯一他人事なので冷静な戯言遣いの提案で、一行も外へ向かう事になった。

「……ま、戯言だけどね」

土の行方がわかった事に安堵する二人には、戯言遣いの呟きは聞こえなかった。

ちなみに、今この時を持って、当初土が目論んだ「あのマークがアイツを指してんならラッキー、悪くてもあのマークが一体なんなのかくらいは聞けんだろ」と言う意図は、戯言遣いのあだ名である無為式・なるようにならない最悪「イフナツシングイズバッド」の名に違わず、どちらの意図もここで斬られたのである。

タビビトビート 邂逅／開稿（後書き）

いかがだったでしょうか？

この作品は一応もうちよつと先まで考えてあるのですが、いかんせん自分の実力では西尾維新さんのような素敵な言葉遊びが出来ず、どうしても野暮ったく読みにくい厨二的文章になってしまう事と（いーちゃんや哀川さんの描写を見ればご理解戴けるかと思いますが）ライダーもファンタジーも無く、ただただ（超）人のバトルだったり推理だったりなので、ライダーが生身の人間相手に手を出すのは、いくら相手が強くてもやつちやいけないだろうと（なにせ哀川さんとか武器も何もなく、ガチで身一つですし……）。

まあスペックだけならクウガライアルくらいなら倒せそうだけど（まあ次話では生身哀川潤VSディケイドなので、そう言うのが嫌な方は読まない方が無難。

（哀川潤の強さを知ってる人にとって相手はライダーだろうがなんだろうが安心して読んで下さい。

正直もやし一本じゃ勝てる気しません）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3965t/>

零崎正識の人間描写(ムータロスのネタ倉庫)

2011年10月7日15時21分発行